

VI 共同利用研究

1. 概要

昭和 57 年以来、研究課題として「計画研究」並びに「自由研究」を併置し、昭和 62 年度には「資料提供」を設置した。さらに平成 6 年度から「所外供給」を新たに設置し、これらに係る共同利用研究が実施されている。

「計画研究」とは、本研究所内推進者の企画に基づいて共同利用研究者を公募するもので、個々の「計画研究」は 3～5 年の期間内に終了し、まとめた成果を公表する。

「自由研究」とは「計画研究」に該当しないプロジェクトで、応募者の自由な着想と計画に基づき所内対応者の協力を得て、継続期間 3 年を目処に研究が実施されている。

「資料提供」とは、資料（体液、臓器、筋肉、毛皮、歯牙・骨格、排泄物等）のみを提供する共同研究として実施されている。

「所外供給」とは、本研究所以外の研究機関で行うことがより適切な研究のために、生体のサルを所外に供給するものである。

平成 12 年度の計画課題、応募並びに採択状況、研究会等の概略は以下のとおりである。

(1) 計画研究

(実施予定年度：課題推進者、下線は代表者)

1. 霊長類などの寒冷適応に関する研究

平成 10 年度～12 年度：片山一道・川本 芳・相見 満・渡邊邦夫・毛利俊雄

霊長類などの動物種が本来の生活環境を離れて、得意な生活条件に拡散したとき、あるいは生活を余儀なくされたとき、いかなる適応戦略を探るか。できれば寒冷適応の問題に絞って、形態、生理、生体、行動などの変化の実態、その要因と機構を解明していく。

2. 霊長類における認知と記憶の特性とその脳内機構の研究

平成 10 年度～12 年度：三上章允・松沢哲郎・櫻井芳雄・中村克樹・脇田真清

霊長類はすぐれた認知、記憶の能力を持ち、その特性と脳内機構の研究は霊長類学における重要課題の一つである。本研究課題では、心理学、神経生理学、神経化学の手法を用いてこの問題の解明に取り組むと共に、サルやチンパンジーをヒトとの比較において考察する。

3. 類人猿の認知行動発達の比較研究

平成 10 年度～12 年度：松沢哲郎・友永雅己・小嶋祥三・濱田 稔・田中正之

霊長類の認知行動の発達過程を形態学的・生理学的研究と関連させ幅広い視点で研究する。特に姿勢・運動、知覚・認知・コミュニケーション、社会的知性などに焦点を当て、類人猿を特徴づける認知機能や行動の特性とその発達過程を、他の霊長類種と比較しつつ検討する。

4. 生体分子の構造解析による霊長類の系統進化

平成 11 年度～13 年度：竹中 修・景山 節・庄武孝義

核、ミトコンドリア、Y 染色体上 DNA の微小変化やダイナミックな変化あるいは cDNA 分析や微量タンパク質の高感度分析等生体分子の構造解析により霊長類の系統進化を明らかにする。

5. サルにおける環境化学物質の蓄積と分子的生理的応答の研究

平成 11 年度～13 年度：浅岡一雄・景山 節

内分泌攪乱物質など、特定の化学物質を対象として、各地のサルとその生育環境に広まる蓄積量を調査研究する。サルの応答を酵素、レセプター、ホルモン調節、感覚や生殖などから分子的生理的に研究する。関連する評価測定法の開発や年齢間比較の研究も望まれる。

6. 比較による霊長類の解剖学的研究

平成 11 年度～13 年度：茂原信生・毛利俊雄

ものごとを理解したり、説明したりするためには比較はもっとも有力な手段のひとつである。霊長類の解剖学的特徴の記載においても、人体解剖用語を使用することによってすでにヒトとの比較が行われている。比較に焦点をあてて、霊長類の多様な解剖学的特徴を研究する。

7. ニホンザルの食物選択と採食競合に関する研究

平成 11 年度～13 年度：森 明雄・加納隆至・大澤秀行・松村秀一

霊長類の食物選択には、個体の栄養学的要求、食物の利用可能性、個体間・群間の競合などが影響する。この問題について、採食戦略と生息環境や社会構造との関連、採食レパートリーや技術の伝播、実験室での選択実験や栄養分析など多様な側面から研究する。

8. 野生ニホンザル地域個体群の動態と保護管理

平成 11 年度～13 年度：渡邊邦夫・室山泰之・大澤秀行・後藤俊二・鈴木 晃

野生ニホンザル各地域個体群の特徴を明らかにしながら、それぞれの将来予測をも含めて保護管理のための方策を探る。各地域個体群の動態や生息実情把握のための方法、猿害と人間による生産活動の調整技法、繁殖パラメーターや有害駆除を織り込んだ将来の動態予測、生息環境の評価などから、従来の保護管理のための議論を再考する。

9. 霊長類におけるストレス反応のメカニズムとその応用

平成 12 年度～14 年度：鈴木樹理・大蔵 聡・友永雅巳

霊長類におけるストレス反応について、基礎的および応用的な研究を行う。物理的のみならず、霊長類に特有な心理的、社会的ストレスに対する生理学的変化や心理学的、行動学的変化の分析によってストレス反応定量系の確立を行う。またストレス反応時の神経・内分泌・免疫系の相互のかかわり合いを解明する。更に、既に確立された定量系を用いて、霊長類の飼育環境や実験環境の評価系の検討を行い、動物福祉への応用研究を進める。

(2) 応募および採択状況

平成 12 年度のこれらの研究課題について、100 件 (155 名) の応募があり、運営委員会共同利用研究専門部会 (高畑由起夫、丸橋珠樹、茂原信生、松沢哲郎) 並びに共同利用研究実行委員会 (浅岡一雄、田中正之、上原重男、川本 芳) との合同会議において採択原案を作成し、協議委員会 (2000 年 2 月 9 日) の審議・決定を経て、運営委員会 (2000 年 3 月 6 日) で了承された。

その結果、94 件 (141 名) が採択された。各課題についての応募・採択状況は下記のとおりである。

課 題	応 募	採 択
計画 1	1 件 (1 名)	2 件 (2 名)
2	5 件 (10 名)	4 件 (9 名)
3	8 件 (15 名)	7 件 (14 名)
4	3 件 (3 名)	3 件 (3 名)
5	7 件 (12 名)	6 件 (11 名)
6	3 件 (6 名)	3 件 (6 名)
7	1 件 (1 名)	2 件 (2 名)
8	7 件 (13 名)	6 件 (9 名)
9	6 件 (14 名)	6 件 (14 名)
自 由	39 件 (52 名)	31 件 (41 名)
資 料	13 件 (15 名)	19 件 (21 名)
所 外	7 件 (13 名)	5 件 (9 名)

(3) 研 究 会

平成 12 年度は、以下のとおり 5 件の研究会が採択・実施された。

1. 環境化学物質の生体蓄積と霊長類の応答
2000 年 5 月 12 日～13 日 浅岡一雄・景山 節・鈴木樹理
2. 野生ニホンザル地域個体群の管理手法
2000 年 10 月 27 日～28 日 渡邊邦夫・室山泰之
3. 大型類人猿の研究・飼育・自然保護－現状と未来－
2000 年 11 月 9 日～10 日
松沢哲郎・松林清明・上原重男・マイク・ハフマン・上野吉一・友永雅巳・田中正之
4. 霊長類形態の 3 次元解析
2000 年 11 月 24 日～25 日 石田英實・國松 豊・中務真人
5. 第 30 回ホミニゼーション研究会「食べることとヒトの進化の関係を考える」
2001 年 3 月 15 日～16 日 上原重男・片山一道・松村秀一・本郷一美・清水慶子